

インターディパートメント論集 第4号 抜刷
2011年3月15日 発行

〈書評〉

池澤夏樹編 『本は、これから』

(岩波新書, 2010)

村上泰子

〈書評〉

池澤夏樹編『本は、これから』

(岩波新書, 2010)

村上 泰子

1980年代の後半から1990年代にかけて、辞書や百科事典、明治・大正期の文豪作品などが次々にCD-ROM化され巷の話題であった。当時とりわけ心を奪われたのが、ポイジャー社のエキスパンドブックで作成された「ルル」という絵本である。「電子本にも感動がある！」というような謳い文句が付されていたと記憶している。ルルというのは主人公の名前である。お転婆姫のルルが退屈しているところへ宇宙から落下してきたロボットと遭遇し、世界中冒険を繰り広げながら友情関係を築いて行くというストーリー。デザインも良く、蓄音機の画像の上にレコード盤の絵をドラッグして載せると音楽が聞こえるといった工夫が随所に施されているのも、決して「わざとらしくない」ところが心憎かった。(原作はフランス語だったが、当のフランスでは売れ行きが芳しくなかったそうである。)だが、わざわざパソコンを立ち上げてCD-ROMを挿入して読むというのは明らかに面倒なことである。当時購入したCD-ROMはいずれも早々に無用の長物と化し、今や我が家の書棚の奥に追いやられて見つからない。

それから20年、電子書籍が今また注目を浴び、電子書籍や電子出版を語る様々な紙の書籍が出版されている。本書は、作家、書店店主、編集者、装丁者、ジャーナリスト、研究者など様々な職業を持つ37人が「本」およびその周辺に対する思いを語ったエッセイ集である。書き手たちの多くは、すでに他で電子書籍について長文を著している。そうした意味で、本書は他へと読み進めて行く一つの基地として適した書であると言える。

著者の生年は1930年代が5名、1940年代が12名、1950年代が9名、1960年代が5名、1970年代が1名である。子どもの頃からコンピュータやインターネット、携帯電話に囲まれて育った世代ではなく、紙とインクの匂いに親しんだ世代が中心である。とはいえ30代半ばから80歳まで幅広いが、37名の書き手に世代間の差は感じられない。彼らが想定する本のイメージは文芸書や学術書であり、現在の電子書籍市場の多くを占めているコミックなどは除かれていると考えてよい。また書き手の排列には編者の意図は表れておらず、五十音順である。

書き手たちの主張は概ね次の3タイプに分けられる。

(1) モノとしての本に意義を認めるもの

本あるいは書棚の「オーラ」という語が3人の書き手から発せられているが、「オーラ」の正体にまで踏み込んだものはない。それは、物体としての本には人間を誘引する何かしらの力があるというある種の直感に近いものであったり、あるいはベンヤミンを想起してのものであったりするのだろう。「オーラ」という語を使わないまでも、有機物である人間が親和性を感じるのと同じ有機物である紙の本に違いない、コレクション性のないものに魅力はないといった論もある。いずれも「モノ」としての本に価値を見出すものである。

「オーラ」と同一線上でしばしば語られるのが、「情報」や単なる「知識」の収集は電子書籍、「思索」は紙の本という切り分けである。無論、個々の論はそう単純ではない。「記録媒体としての電子書籍、自分の頭を鍛えるための紙の本という棲み分けができそうだ」(池内了)、「【情報】を収集することは自由だ。だが、書物との遭遇によって与えられる真の啓示や発見は、情報記号の手軽な消費によってではなく」(今福龍太)などがそれである。

電子書籍が本の「物質性」を奪い、知識が断片化することへの懸念を表明する外岡秀俊の論もまた、それによりこれまで伝承されてきた「知の基盤」が失われることを危惧し、「モノ」としての書籍への信頼を示している。

(2) 紙の本に伴う時間の流れに着目したもの

(1) に登場した書き手たちは凡そ、電子書籍を巡る狂騒につきまとう効率至上主義に嫌悪もしくは不安を感じているようでもある。同じことは「ゆっくり」な時間を本に求める次の人々にも言える。

このタイプに属するものには「本という文化、読書という文化の特性は、ゆっくり、ということ」(長田弘)、「価値のあるテキストを、ゆっくりと、繰り返し読んで消化して、生きること・死ぬことの糧となすこと」(宮下志朗)がある。また、「ふつうの人生を送っている人が、限られた時間のなかでたどりつかねばならない、最適な本とはいったい何だろう」として「納得できる何冊かの本とほどほどに出会える才能がありさえすれば」幸福とする柴野京子も同じであろう。「商業主義ベースの急激な進展は、必ず残すべきものの判断を見誤らざるを得ないのではないか。そうであればあるほど、それはできる限りゆっくりとした動きの中でしか判断できないはずなのである。」(中野三敏)も視点は異なるが、拙速さへの抵抗を示している点で本にまつわる「時間」に着目した論と言える。

(3) コンテンツに意味を見出すもの

読書の形など関係がない、読むのはあくまでもその中身、コンテンツであるとするタイプである。「どんな形をとろうとも、読書は読書」(池上彰)、「コンテンツ生産業は媒体がどうなっても残る」(上野千鶴子)、「紙か電子かは門構えの違い」(最相葉月)などがそれである。「書籍の実質は書かれている／表現されている内容」(長尾真)として本のコンテンツに同様の価値を見出している。書物の解体、情報の断片化、その再構築までも志向するものもある。知識の断片化を憂えた外岡と対照的である。これらは(1)の論に見られた本の「オーラ」を電子書籍に求めていない。

他方、電子書籍もまたオーラを纏いうるとするものもある。「やがて電子書籍の画面にアウラを感じるようになるのではないだろうか」(西垣通)がそれである。松岡正剛もまた「本を読むということは本ごと何かを読む」ことであ

り「コンテンツだけを追うものではない」、電子書籍は「読書にひそむ奥行きや読者にかかわる何かを徹底して見出す好機」とする。電子書籍での読書も紙の本の読書も、読むもの丸ごとが読書である。

現状の電子書籍はその多くがユニクロのTシャツに近いものであるかもしれない。同一の画面に同一の本文フォント、画一的な枠の中に押し込められている感が強い。それに比して紙の本は文庫本や新書のようなユニクロ風のものから高級ブランドの凝ったデザインのものまで百花繚乱である。以前、絵國香織『日のあたる白い壁』（白泉社、2001）を中身よりもデザインで衝動買いしたことがある。キャンバス風のザラっとした白ジャケットの手触りも、正方形に近いという珍しい判型も、背文字の「日」だけが赤いことも、ジャケット中央に小さく据えられた児島虎次郎の「睡れる幼きモデル」の絵も、すべてが好みだった。こうした反応は一見(1)のタイプに相当すると見えるかもしれない。しかしそれは過渡的なことである。電子書籍においても、ハードウェアのみならず電子コンテンツのデザイン性もまた確実に成熟して行くものである。

電子書籍の存在を認めながらもなお紙の高度な表現可能性に重きを置くのが原研哉である。原は「本になる」ことが希少性を生み、新たな付加価値を持つようになるを考える。上野の言う「伝統工芸品」として残る本のイメージも同種であろう。

(3)の延長上にやや方向の異なるものとして出版流通システム批判がある。電子か紙かを問う前に、現在の出版流通システム自体が制度疲労を起しているのではないかという問いかけである。本書で語られている事々はいずれも振り返ってみれば、津野海太郎らが中心になって1997年に創刊した『季刊本とコンピュータ』の中にすでに見られた。20年前に議論は出尽くしていたと言ってよい。この20年間、出版流通業界は何をしてきたのか。既得権益を守って自らが存在し続けるためにひたすら出版点数を増やし、粗製濫造して、返本の山を築いただけではないか。「本来人々の読みたいと思う本の数など限られているはず。それなのに、相も変わらず増え続ける出版点数—もう何年も出版

業界は異常な状態」（鈴木敏夫）、「問題は日本の出版産業が、インターネット、携帯電話の登場、普及とは独立に、すでに低迷、低落していたということ」（土屋俊）、という指摘があるが、特に鈴木の子の言葉は手厳しい。「冷静にこう言いたい、『適正な規模になる』と。だから岩波書店にはこんな本を作らずに超然と屹立してほしい。」

冷静に、超然としていることとおそらくは表裏一体であろう「情熱」が本にあるのかと問うものもある。「人々が『読みたい』と熱望する本を」（池上）出す情熱、「無償でも届けたい」（上野）という情熱、「紙の本に匹敵するか、それを超える出版」（紀田順一郎）を志す情熱、そうした情熱は出版界にあるのか。

先日、ボイジャー日本の萩野正昭氏と話をさせていただく機会があった。そこには出版、言論に対する限りない情熱が溢れていた。（ボイジャー日本草創期からの紆余曲折を熱く綴った『電子書籍奮戦記』（新潮社、2010）もある。）当日、「電子書籍を批判する人はいくらでもいる。しかしやってみる人は少ない。」という言葉が特に印象に残っている。本書では「古井戸」という一本の中国映画が紹介された。中国内陸部の古井戸の横に大きな石碑が立っている。そこには井戸を彫り続けた歴史が刻まれている。映画はその井戸の歴史にまつわるストーリーを語り始める。井戸には「忘れじの記憶を共有する何か」（萩野）があった。井戸にまつわる生きた記憶をとどめた石碑、その石碑から記憶を蘇らせて現代に運んだ映画。映画を本に置き換えて、本を欲する人々に「世界の石碑から記録を引き出しインターネットを通じて物語を流通」（萩野）させることが彼の情熱の先にあるものである。

図書館の重要な役割の一つは「忘れじの記憶」の刻まれた記録を淡々と着実に、しかし情熱を持って後世に遺し伝えて行くことに他ならない。件の『ルール』のCD-ROMがたとえ手元に残っていたとしても、いま目の前にあるパソコンでそれを再生することは恐らく不可能であろう。国立国会図書館の平成15年度のサンプル調査によれば、平成6年度以前に受け入れられた電子資料の利用可能性は15%以下であり、その原因の8割はOSやアプリケーションの不

適合にあった。その後も調査や対策が行われてはいるが課題は多い。情熱を持って作り出された記憶が情熱を持って記録されるとき、遙か未来の読者がその記録の存在を知ってそれを入手し、過去の作り手の情熱に触れられる環境が不可欠である。

〈了〉